三　島　市　　（通巻第19号）

郷土館だより

Vol. Ⅶ No.1
1984. 8. 1

市指定文化財
天孫降臨図塗額　龍沢寺

目　次

教育長あいさつ……1
郷土館長あいさつ……1
勝俣文庫目録と滝之本連水……2
本陣文書……3・4
本陣文書目録の刊行……5
歴史研究会（友の会）紹介……6
行事報告、その他……7

郷土理解のオアシスとして

教育長
杉山　英一

先日、書庫の片隅から“郷土館資料の寄贈についてお礼„という綴が出てきました。昭和46年４月15日という日付が入っていました。貼付してある寄付物品受領書は８枚で、696点です。内容も文化・文政・天保の改革・嘉永・安政年間の金子証文や田地反別についての覚書から、四書五経、発句集類、縦笛横笛や明治・大正時代を主とした教育図書や尺八・水筒用のひょうたん等で先々代以前の生活を偲ぶよすがとなるものでした。

私は、この日（昭和46年４月15日）の日記を開いて見ました。この日、市の学芸員らが数名みえて、土蔵の二階に閉じ寵り、終日、乱雑に収蔵してあった民具や図書を根気よく整理して、この年10月に開館予定の郷土館資料として収集に当ったのでした。『この不完全な土蔵に放置しておくより、完全な保存施設のもとで、資料としていただければ、ささやかなものでもそれらしく価値づけられると期待して喜んで提供したい』と日記にメモしてありました。

先般、格調高い勝俣文庫の目録作成を学芸職員等の手ですすめたとき、その付帯として、上記696点を郷土館所蔵古書目録・教育関係図書目録として整理分類して目録作成ができてきました。まことにひなびたささやかな寄贈物でも、誠意ある取扱いに接すると本当に心あたたまり、郷土館に保存していただいて良かったとありがたい気持になりました。

この度、はからずも郷土館運営の責をあずかる立場になりました。貴重な郷土の文化遺産を前にして責任の重大なことを感じます。見識豊かな運営委員の皆様のご意見をいただく中で、館長始め職員共々、愛され親しまれ、郷土理解のオアシスとしての郷土館運営をいたしますので、市民皆様の積極的なご理解ご協力をお願いいたします。狭溢な資料博物館ではありますが、展示をご覧いただくだけでなく、古里三島の歴史を探り、郷土意識を育て、生涯学習への意欲づくりをする館として創意し、充実して参る所存です。

どうぞ、青竹のさやかにゆれる郷土館のテーマ展・企画展・特別展から万葉植物園へ歩をお運びください。

新館長のごあいさつ

三島市郷土館長
永沼　朋康

盛夏を思わせる暑い日が続いており、楽寿園内にある池の鯉も楽しげに泳いでいるように見えます。

楽寿園内にある郷土館も昭和４６年10月開館以来13年経過し、少しずつ内容が充実してまいりました。

館内での講座、テーマ展、特別展等も職員一丸となってより良いものにしようと努力しているわけであります。

このたび４月の人事異動で郷土館長の辞令を受け着任いたしました。省り見ますと開館当時の昭和46年社会教育課の職員でしたので三島市内や近隣市町村を毎日毎日車で資料集めしたことを思い出しました。社会教育活動は非常に広範囲で間口が広く奥行が浅い面が多かろうと思いますが、その中で特にこの頃各地で見直されている「ふるさと」と云うことでは郷土館の使命は非常に大きいものがあると思います。とかく忘れがちな郷土の風習、民俗や芸能の面からもこれを保存して長く後世に伝える世代の継承こそが社会教育活動であり文化活動であり郷土館の使命ではないでしょうか。

三島市は文化財の豊富な地であり古い歴史を持つ街であり、特に三島大社を中心に発展した街であり、その他玉沢妙法華寺、沢地竜沢寺等々の名刹があり、特に妙法華寺には絹本着色日蓮聖人像等の重要文化財等があります。

現在郷土館では二階三階では郷土の民俗歴史資料が常設展示をしております。一階の講習室では定期的に古文書読習会や講演会等が開催され、市民の郷土の学習する場として活動しております。特に本年度は数年来の懸案でありました勝俣文庫目録、樋口本陣目録等の発行も出来、一般の人々

↗

に販売をはじめました。これらの文庫資料を早々に整理し一般の人々に資料公開すべく作業を進めております。

最後に郷土館が三島市の文化財の保存と後世への継承すべく職員一同努力しております。新任の郷土館運営者として営なまなければならないことが山積しております。

皆様のご協力を切にお願いするものであります。

勝俣文庫目録と滝之本連水

郷土館では、勝俣文庫目録を作成し刊行しました。（200円）これは勝俣文庫（約5000冊）の分類目録・索引、郷土館所蔵図書目録（約1300冊）教育関係図書目録（約700冊）から成るもので、郷土館が所蔵する古書籍を網羅するものです。

目録の中心である勝俣文庫は、昭和28年、三島市佐野在住の勝俣厳氏より三島市立図書館へ寄贈されたものである。古くから伊豆佐野の名主役を務めた勝俣家が代々買い求めたもので、江戸中期から、明治に及ぶ書籍である。

昭和46年に三島市郷土館が設立されるに及び、昭和49年、図書館より移管されたものである。この時、勝俣文庫の他、図書館で所蔵していた古書籍（三島尋常高等小学校、三島南尋常高等小学校三島文庫他より寄贈されたもの）も同時に移管され、郷土館所蔵図書の中核となる。

教育関係図書は、明治初期から昭和中期までの教科書、参考書、問題集等で、教育者を輩出された家柄の青木千代作氏と杉山英一氏の寄贈なるものである。

勝俣文庫の内容は、文学書、歴史書、思想書、漢籍等で、購入者のすぐれた教養と向学心を推し量ることができる。特に目を引くのが俳諧関係の書籍が430冊もあり、勝俣家が特に俳諧に関心深かったのがわかる。

勝俣文庫を買い求めた中心は、勝俣常昭（雅名花岳）勝俣猶右衛門（俳号滝之本連水、猶右衛門は勝俣家の家督が代々襲名した）の２人と言われる。花岳は生年不詳、安政６年(1859)に死亡。滝之本連水は天保３年(1832)花岳の長男として誕生し、明治31年(1898)に67歳の生涯を閉じている。勝俣家は天保５年に年貢米32俵納めた記録があり相当裕富な家といえよう。当時の地方富裕階層は俳諧にたしなむのが常であったが、花岳・連水もその例にもれず、俳諧をよくし、書画にもすぐれた教養人であった。

特に滝之本連水は、俳人として教育者として三島の偉人の一人に数えられている。連水は、三島出身の孤山堂卓朗と、沼津仲町の種玉庵連山を師として俳諧を学び、大成し、明治元年(1868)には師連山を継ぐ。「俳関」の名も連山より受け継ぐことになる。

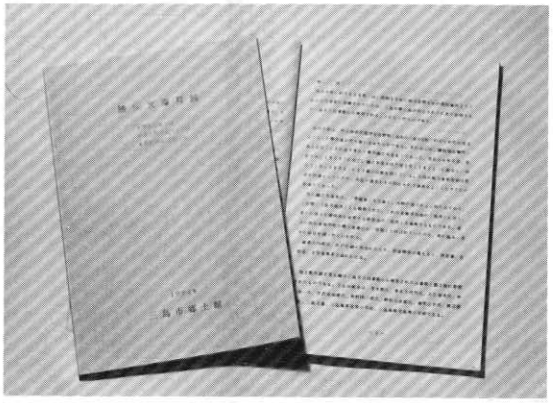
「俳関」とは、東海道箱根の関所に対し、俳諧道の関所を意味する。滝之本連水の名が広く各地に広まると共に、「俳関」の名に違わず、東海道を旅する俳人が、教多く勝俣家に逗留し、歓待されたという。

連水の俳句集は明治25年に上梓された「雲霧集（くもきりしゅう）」のみであるが、自然を鋭くとらえた句は評価が高い。佐野の部落は、箱根の山裾の、街道より引き込んだ所にある。北西に富士の雄姿を仰ぎ、水は清く、空気は清浄で、桃源郷のような静かな農村である。連水自身、豊かな自然に身を置き、感性を磨いたことであろう。

水音や　秋の深みも　夜もすがら　　連水

（尚、滝之本連水については「三島市誌中巻」，長谷川福太郎著「岳南の俳諧人伊豆佐野の人滝之もと連水」に詳しい。）

＊郷土館では、今秋より、勝俣文庫他の所蔵古書籍を公開します。希望者は郷土館内で閲覧することができます。コピーサービスは致しません。詳しくは郷土館まで（71－8228）　　（福田）

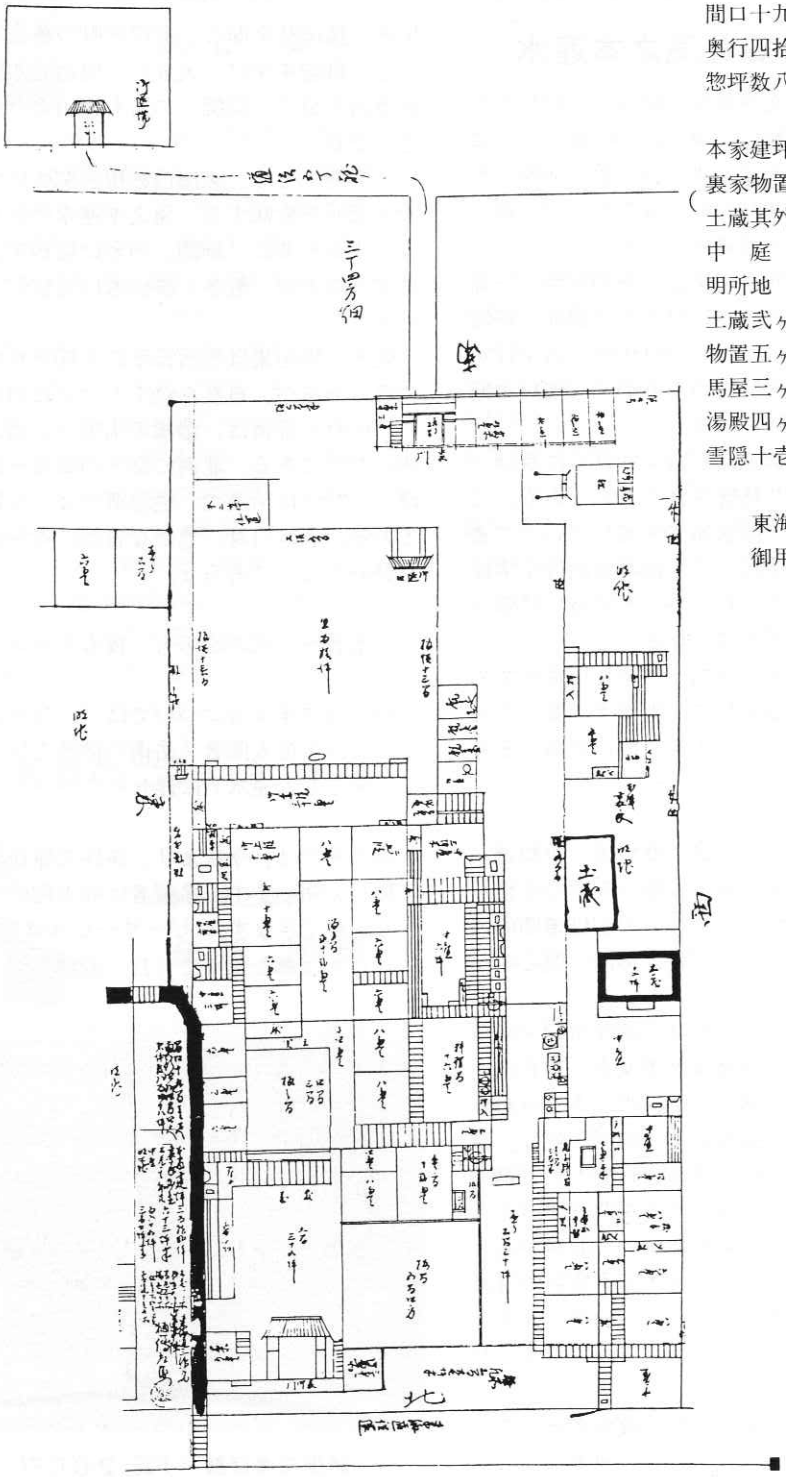


勝俣文庫目録　１冊　２００円

三島本陣文書整理

★トピックス★

本陣職あれこれということで、本陣目録中から興味ありそうな文書を拾い出してみた。今回は間取り図、献立の中から話題を探してみよう。



間口十九間壱尺
奥行四拾弐間四尺
惣坪数八百四十八坪

本家建坪三百拾弐坪
裏家物置
土蔵其外共　六十三坪半
中　庭　百六十五坪
明所地　三百七坪半
土蔵弐ヶ所
物置五ヶ所
馬屋三ヶ所
湯殿四ヶ所　但壱ヶ所弐本○○
雪隠十壱ヶ所

東海道三嶋宿
御用達御本陣
樋口傳左ェ門 ㊞

本陣の間取りと食事について

本陣の間取り

東海道中、建坪のもっとも大きかった本陣は、鳴海宿本陣の676.5坪であった。200坪前後の本陣がもっとも多く、100坪以下のものはなかった。本図に見られるように、当三島宿の樋口本陣は312坪で、東海道中でも大本陣の部類に入るものといえよう。本陣の建物は、玄関、書院を備えていて、門を構えているのが原則であった。伝承によれば、現在、円明寺（芝本町）の門になっているものが、樋口家の門だったと聞く。図面を見てみよう。東海道往還に面した側に、表御門が見える。御門を入ると、土間35坪とある。現在の家屋一軒分の坪数に相当するかなり広い土間だった。土間の突き当りに、これもかなり広い敷台があり、その奥に３間・４間の板の間が続いている。板の間から最奥の御書院30畳までがかなり遠く、途中には溜の間22畳の外８畳間が一間ある。そしてようやく御書院に到達する。この書院を備えていることが、本陣としての条件だったから、各本陣では書院の建築には趣向をこらしたものだった。樋口本陣の場合、書院から眺望できる庭にも趣向をこらしていた。大小の名石を配置し、池を作り、種々の樹木を植えていた。本陣庭には、宿場のどこから見てもそれとわかるほどの大木もあって、本陣の森と言えるほどの景観を作っていたと伝承は伝えている。ここを定宿としていた大名達は、清い湧水の流れと豊かな緑のほとりで、長旅の疲れをいやしたものであろう。

本陣の献立

旅の楽しみの一つに、行く先々のうまいものを食べるということがある。大行列を組んで街道を往来する大名にとっても、各宿々での食事は大きな楽しみであったに違いない。大名旅行という現代風の言葉の感覚から考えると、さぞ豪華なメニューが待っていたことだろうと想像するのだが。

文化15年（1818）に、本陣家当主樋口伝左ェ門が提出した本陣献立がある。

覚

寅三月

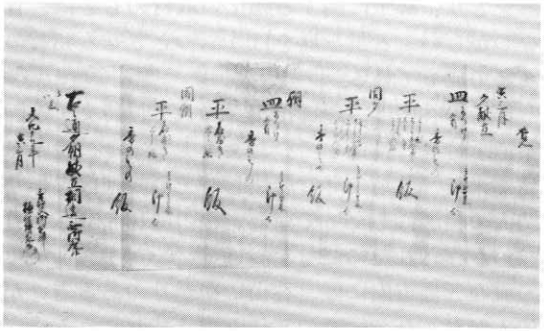
夕献立　　壱汁弐菜
　皿　につけ　　汁
　　肴
　　香のもの
　平　わらび　　飯
　　こうりこんにゃく
　　こごり身
　　いも
　　すこんぶ
同夕　　壱汁壱菜
　平　わらび　　汁
　　こうりこんにゃく
　　こごり身
　　いも
　　すこんぶ
　　香のもの　　飯
朝　　壱汁弐菜
　皿　につけ　　汁
　　肴
　　香のもの
　平　石やきとうふ　　飯
同朝　　壱汁壱菜
　平　石やきとうふ　　汁
　　香のもの
　　飯

右之通夕朝献立相違無御座候
以上

文化十五年　　三嶋駅御本陣
　寅三月　　樋口傳左ェ門

想いの外質素な印象を受ける。この文書が単独に見つかったものであるため、献立の報告をどこに提出したものか、誰のためのものかは明らかではない。献立内容からみても、それほど高位の身分の人のためではなかったようにも思える。

味はどうだったかということになると、現代人は誰も賞味した経験が無いので不明ではあるが、調味料等は使わなかったであろうから、味もまた異なるものだったにちがいない。　（杉村）



文化１５年の献立

三島本陣「樋口家文書目録」の刊行

三島本陣『樋口家文書目録』を刊行した。B5版、96ページで、1844件の文書目録が内容となっている。目録内容の内訳は、三島市指定文化財第11号の樋口家所蔵三島宿本陣関係史料56件、行在所関係文書 154件及びそれら以外の樋口家文書1634件等である。

文化財指定の本陣関係史料については、昭和45年に三島市が指定を行ない、簡単な目録を作成し公表してあったため、今回の作業の中ではこれを別格扱いとし、本目録中の冒頭に一括掲載しておいた。また、目録末尾の行在所関係文書 154件については、昭和12年に静岡県が県内の聖蹟資料集を刊行した際に活用したこともあり、樋口家において、これらのみ整理されまとまっていた。従って、今回の整理、編集の主な対象となったものは、1634件の、当家の公私にわたる文書群であった。

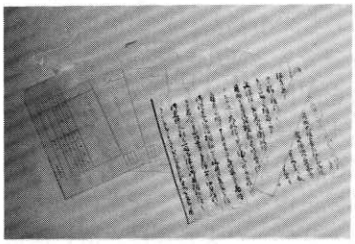
現樋口家当主の樋口正智氏によれば、本来はもっと多くの史料があったのだが、水にぬらしたりでかなり失なったものも多いということだった。整理しながら、くり返し惜しい気がしたものである。というのも、本陣職200余年の同家にしては、古い文書が少なく、かつ全体量としても不満足な量であったからだ。しかしながら、現存している1600件以上の文書が無価値なものというのではない。それらの中からは、実にさまざまでたくさんのことがらが、今新たに知り得るのである。

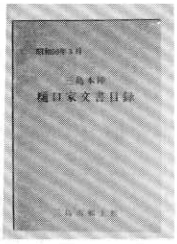
樋口家は三島宿の中央に居を構えて、もう一軒の世古家と共に、代々本陣職を世襲してきた。同時に両家は、宿場を代表する有力者であり、問屋役等の公職も代々務める家柄であった。本目録によって、こうした特別な家の歴史が手に取るようにわかるはずである。

文政、天保年中に一群まとまって見られる裃拝領願の上申文書によれば、本陣家が、東海道を往来する諸候との結びつきをいかに大切にしていたかがうかがえる。諸候と本陣家との結びつきは、由緒書でも知り得る。某家と当本陣との定宿関係は何年以前からの久しい関係であるから、今回の往来においても定宿指定をよろしく、といった文書が実に多い。本陣営業の安定性を願うこともあったが、それ以上に、名家、旧家としての誇りが由緒書の中にはよく表われている。

明治になって本陣制度の廃止以後、樋口家は一般旅館となってしばらく営業を続けていた。特に、明治初年頃における3回の天皇行幸の際には行在所となるなど、最大の栄誉を受けている。

本目録をぜひ求められて、研究に活用して下さるよう願う次第である。　（杉村）





刊行なった目録と本陣文書の一部

収集資資紹介

『三島竹枝』

『三島竹枝』は、杉田呑山（1854～1945）が詠じたもので、昭和9年に刊行された。七言絶句の形をとり、郷土に関する幅広い取材のもとに、昔なつかしいふる里三島をほうふつとさせる43首の漢詩で成っている。

作者の呑山は、豊橋市出身の人で、詩文・絵画茶道・造庭に精通していた文人であった。晩年三島に来て、菰池の畔に居住して三島吟社会を作り門人の指導にあたっていた。その間10年『三島竹枝』が作られたのだった。

現在三島市内には、呑山にゆかりのある方々が何人かおられて、師の業積を讃えておられる。

（杉村）

収集資料一覧表

採集日	S59・2・8	59・5・6	59・5・24	59・5・31	59・6・1
提供者（住所・氏名）	大田京仁町	大社町	大宮町	芝本町	大社町
	梶山滋男氏	鈴木しゅう氏	蛭海静子氏	下田舜堂氏	湯山孝氏
資料	唐千ムマ箕面シコ、ロ大編ンガガみ、スラナオ俵キンのガ、ガ、サ編ガ台ハ、ッタオリ	布目瓦片（代用国分寺）	重箱（5段）	『三島竹枝』	三島市街図
点数	10	1	1	1冊	1

愛染院趾内に建つ三島竹枝の碑

歴史研究会(友の会)紹介

三島市に他市町村から転入してきた人の数は、昭和49年４月から昭和58年３月末までの10年間で64,633人になる。昭和49年の人口が88,221人、昭和58年の人口は97,162人。人口はこの10年間でわずか8,941人の伸びにしか過ぎない。

こうした数値から考えられる事は、転入・転出を繰り返えす人を差し引いて考えても新しく三島市民になった人の比率の高さを示すものと思われる。

「郷土館はどこにあるのですか。」と市民に聞かれ、ビックリしてしまう事があるが、こうした背景を考えれば驚くに値することではなさそうである。

こうした新住民の増加は郷土意識の希薄さにつながり、ますます郷土学習の場の提供が求められてくる。

郷土館では、郷土意識の涵養と生涯学習の充実を目ざして歴史研究会（友の会）を発足した。

市広報で会員募集をしたところ70人以上の申込み希望を受けた。三島市以外の方は特別の事情のある方以外は入会を断わらせていただいたが、歴史に興味を持つ同好の士を行政区画で分けることは忍びないことであると感じた。来年度はこうした人達もなんとか参加できる方法を考えてみたいと思う。

会の運営経費は講師謝礼とテキスト印刷代、バス代等が主なものであるが、郷土館予算の中からの支出と会員会費でまかなう予定である。ちなみに会員の年会費は1,000円である。

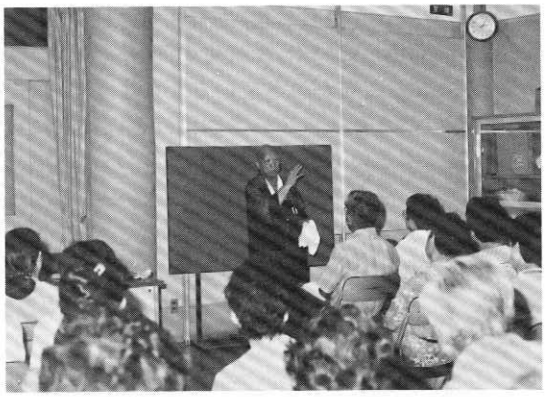
歴史研究会の年間事業計画として今年度は市内の主要寺社について学習する。具体的には三嶋大社（大宮町）、龍澤寺（沢地）、妙法華寺（玉沢）の歴史と寺社の心（精神）についてそれぞれの住職、神主に話をしていただき、つぎに現地におもむき直接目で見て、手で触れて自分のものにしていきたいと考えている。

去る７月７日(土)には、第１回講座として龍澤寺の住職、鈴木宗忠老師に「龍澤寺の歴史と禅の心」についてお話しいただいた。

受講者の目と体は受講者の心を写すかのように真剣に輝き、老師の話に我を忘れて聞き入っていた。我々俗世の者には耳の痛い話も数多くあったがそれをユーモアで温かく包み込んだ老師独特の語り口は、修業を積んだ人の徳を充分に感じさせるものであった。

人の世の道理・筋道。無から有を生む心。歴史を学ぶ人達はただ単に知識を得ることを目的にせず、過去から現在、そして未来への人間の本質的な摂理を勉強せよ。等々。

（詳細はいずれこの紙面を借りて発表したい。）



歴史研究会第１回講座で話をされる鈴木宗忠老師

最後に歴史研究会（友の会）の将来あるべき姿を考えてみたい。すでにお気付きの事と思うが、歴史研究会というどちらかというと学問的傾向の強い名前と、友の会というサークル臭の強い名が矛盾ではあろうが並存している。これは将来分離して、それぞれの特色を持つ活動を進める為の過渡的措置の為である。

歴史研究会は将来、市内各地域の公民館にある郷土史研究会のセンターとしての役割を担いつつ、年間ひとつのテーマを決めて、独自に調査・研究活動を進める会としたい。もちろん郷土館事業のひとつとして機能することは言うまでもない。

友の会の方は、今年度同様、講座を年間通して聴講する活動を主として、会員相互の親睦、郷土館活動への協力などを主目的とする。

以上、概説的に今年度発足したばかりの歴史研究会（友の会）の紹介と将来の構想を記述してみた。試行錯誤の繰り返えしになると考えられ、皆様に御迷惑をおかけすることも多いと思いますがご支援の程よろしくお願い致します。

（稲木）

郷土館体験講座　　草木染と糸つむぎ

早春の3月24日、井上一雄郷土館運営委員を講師に、20名の受講生が、もみじの葉の草木染と、羊毛の糸つむぎに挑戦しました。

もみじの葉をアルミのなべで2時間ほど煮て、染染を作り、もめんの白布をつけます。にごった茶色になった布を媒染液(発色を促す作用がある。生石灰又は硫酸第一鉄少量を水に溶いたもの）に浸すと、サーッとからし色(生石灰)と鼠色（硫酸第一鉄)に変色していく。受講生の間から大きな歓声がわく。まるで布が生きているかのようである。これを空気にさらし、2～3回染液と媒染液に交互に浸け、水洗いして日陰に干す。かわいて出来あがり。材料さえあれば、手軽にできるので、是非各家庭でも試みていただきたいと思います。

午後は、井上講師がスウェーデンより持ち帰られたコマの形をした糸つむぎ機で、糸つむぎの実習。北欧の人々は日常生活の中で糸つむぎ、機織りがなされているという話に、日本も負けじと受講生の皆さん奮闘しましたが、太くなったり細くなって切れたり、糸の太さが一定しません。やはり熟練が求められるようです。家庭で手軽にできる、草木染や糸つむぎが、一般に広まれば、家庭生活がより豊かなものになることでしょう。(福田)

表紙写真解説
天孫降臨図塗額（龍沢寺蔵）

明治11年、長八は龍沢寺の星定老師のもとに参禅した。現在同時に残っている長八の鏝作品は、すべてこの時のものである。仏寺に居ながら神話を題材にしたこの作品は珍しいものと言えよう。境内に建っている鎮守堂に掲げるために製作したものである。雲上に、瓊瓊杵尊を中心に天照大神と一群の人物を対照させた配置はみごとである。

編集後記

梅雨もあけて夏の盛りを迎えました。歴史研究会（友の会）の発足の為の準備と第1回講座の開催に向けて、てんてこまいの忙しさでした。この小紙の発行日が、ちょうどその時期と重なり、充分な時間が取れず、編集が不満足なものとなってしまいました。執筆をされた諸兄はもちろん、読者の皆様にも見にくい箇所がありはしないかと気にしております。今後共一層頑張りますので、ご指導よろしくお願い申し上げます。

（稲木）

山中城跡資料展　―報告―

去る3月20日より5月20日まで伸べ62日間開催された山中城跡資料展は好評の内に終了しました。

当初4月20日までの予定であったのが、各方面の要望もあり1ヶ月展示を延長し、延べ23,687人の見学者を迎えました。

山中城跡は、中世末期の城であり、豊臣秀吉の小田原攻めの際、激戦の末陥落しました。昭和48年、発掘調査が開始されてから10年経過し、史跡公園として整備され、市民の憩いの場として親しまれています。

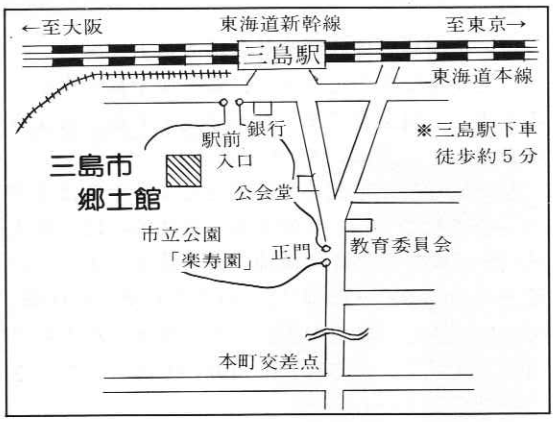
主な展示品は次の通りです。

出土遺物――剣・笄・かぶと片・鉄砲玉・薬研・鉄砲の一部など、合戦の激しさを物語るもの

山中城攻防戦屏風――(180cm×360cm)三島市内で長く美術教師として奉職された故穴倉達雄氏が描かれ、郷土館に寄贈したもの。山中城の合戦の想像図である。西軍に包囲された山中城内では、守将間宮康俊を始めとする北条軍が死闘をくり広げ、攻撃陣中には豊臣秀吉・徳川家康も見えます。天不統一を目前に、7万の兵の戦いが、興味深く描かれています。　（福田）

利用案内

休館日　毎月第1月曜・12月27日～1月2日
開館時間　午前9時～午後4時30分
入場無料　（但し、楽寿園入園の際、有料）



郷土館だより　No.19
昭和59年8月1日発行
（年3回発行）
編　　集　三島市　郷　土　館
住所　〒411　三島市一番町19－3
TEL 0559－71－8228
発　　行　三島市教育委員会